専念寺通信

十一月号（NO．１１１）
http://sennenji.s296.xrea.com/

秋も深まってまいりました。今年も残すところあと２ヶ月、インフルエンザが猛威をふるっていますが、みなさま、おかわりなくお過ごしですか。『通信』１１月号をお届けします。

☆争うということ

この『専念寺通信』でもときどき平和について、戦争についてお話しして参りました。お盆やお彼岸などの行事のある月には、それぞれの仏教的な由来などを書くことにしていましたので、今月はみなさまと、「争う」ことについてともに考えてみたいと思います。人はなぜ争うのでしょうか。子供のころから、喧嘩はよくあることです。「負けたら、勝つまで帰って来るな！」と男の子を叱咤している親御さんを知っています。子供の喧嘩は大人社会の縮図です。身体の大きいもの、力の強いものが勝って、年の小さい子は年の大きい子にはかなわない、という風に。そして、インターネットが普及して、子供も携帯電話やパソコンを使うようになると、いわゆる「喧嘩」は表面に出にくくなり、より陰湿になって来ました。「いじめ」という言葉が一般化して、報道でもよく使われています。人を死に至らしめる行為は「いじめ」などのひとことで終わらせることのできない、ひとつの犯罪です。この仕組みは、大人社会と同じことが子供にも起こっていると考えるべきしょう。争いは自然に起こることもありましょうが、何かが、誰かがきっかけを作っていることも、

ままあります。個人単位でも、町単位でも、国単位でも、はじめに「争わない」とまず決めてから、物事に当たれば、流れは少し変えられると思えます。主義の違いは誰にでも、どこにでもあります。国が違えば考えや習慣も違い、信仰する宗教が違えば、心のよりどころも違うでしょう。利害の対立もあるでしょう。ここで大切なことは、まずは「争わない」ことです。手っ取り早く「勝ち」を目指さないことです。人と人のあいだには、言葉という非常に大きな役割を果たす道具があります。この道具をまっとうに使い、ぎりぎりまで手離さないことがとても重要です。勝ち負けを意識すると、たいてい、人は多数派にくっつきます。有利だからです。しかし、私たちは、自分の信ずるところに正直に道を選ぶべきです。「勝ち」か「負け」かを考えて選ぶのでなく、もし、自分を尊敬してくれる誰かがいて、「なぜその道を選んだの？」と聞かれたときに恥じない方向を選ぶことは無理でしょうか。「自分の信ずるところ」は宗教心とは少し違います。発達しすぎた私たち人間が見失いがちな、普通に生きるための「智慧」です。自分も生かし、仲間も生かす、という、ごく普通の素朴な「助け合いの衝動」です。落ち着いて考えれば、私たちの中には、そのような、素朴な良い部分が残っているはずです。これをバカにしてはいけません。偏差値が高くなればなるほど減って行き、社会的地位が高くなればなるほど減っていくのが、この、私たちの本来持っているはずの「素朴」な部分です。情報やお金やらに邪魔させることなく、みずからの中にある、生まれもった、人間が互いを思いやらずにいられない要素を、ぜひとも保ちつづけましょう。これこそが「お金で買えない」「高偏差値大学で教えてくれない」貴重な財産です。私たちひとりひとりが、そして国を背負って行く人たちが、あきらめずに、この財産を捨てずにいる限り、争いは最小限にとどめることができると信じます。

さて、今月号の写真は銀杏の実です。ずいぶんたくさん取れました。本堂前で太陽にあてているところを写しました。みなさまの心が平安で、素朴で静かなものでありますように。

平成２１年１１月１日　　大黒